

# おさの音 (一幕)

三好十郎

時

現代。

所

貧しい農家の縁側を中庭の方から見たところ。

人

緒方次郎 (盲目。廿五歳)

同 末吉 (その弟。十七歳)

夏 子 (次郎の許婚<sup>いいなずけ</sup>。廿四歳)

儀 八 (びっこの老人。六十過ぎ)

慰問の人々。指揮者。青年團の團員達。女學生。女生徒達。老人。中年の百姓。老婆。若い婦人。その他の有志。

静かな農村の午後。縁側の陽のあたった障子を背に、洗いさらした手織の着物を着た盲目の次郎があぐらで坐り、その前に汚れた服の末吉が万年ペンを持ち縁側にひろげたレタアペーパーの上に蔽いかぶさるようにして、兄がいうのを待っている――

次郎は落着いた、きげんの良い顔をしている。しかし、はたから見ると、にわか盲の常で、どことなく頼りなげに寂しそうだ。末吉は十七といっても身体つきはスツカリ大人と同じく遅<sup>たく</sup>ましく、背などは兄よりも高い位である。

末吉 ……はい、いいよ、兄さん。

次郎 レタアペーパー持って来たか？

末吉 うん。

次郎 ……チョット待ってくれ。今考えてるんだ。

末吉 しかし僕あ字が下手だよ。

次郎 読めるにや読めるんだろ？

末吉 チェツ、なあんだい字は字だい！

次郎 そんなら、いいさ。ハハハ、怒るなよ。

末吉 怒りやしないけどさ。……だけど、なんだなあ、兄さんが病院からよこしていた手紙を

書いてくれた人は、うまいね。看護婦さん？

次郎 うむ……（何か思い出している）

末吉 一年間ズットだからなあ、親切な人だねえ。それに、字がうまいとそれを書いた人まで綺麗な人の様な気がするからトクだねえ。綺麗な人だろ？

次郎 うん、同室の連中はそういつていた……とにかく聲は綺麗な人だったよ。

末吉 ……（ハツとして兄の顔を見上げてからドギマギする）僕あ、僕あそんな……チエツ悪い事いっちゃった、畜生！

次郎 （ニコニコして）いいんだよ、末吉。自分でさへ、寝起きなんかウツカリ盲になっているのを忘れていたりする事があるんだものなあ。

末吉 ……かんにんしてくんな、兄さん。……

次郎 いいんだったら。ああ、三番の上りが通る。

（列車の通過する音が微かにかすして来る）

末吉 ……（まだしよげて、列車の音が遠く消えて行くのを、聞くともなく聞いている）

次郎 ……どうも、なんだな、氣のせいかわらんが以前よりも汽車は重くなったようだ。貨物

や乗る客が多くなったのかな。

末吉 音を聞いて、そんな事がわかるの？

次郎 わかるよ。……（少し離れた所で鶏がコケッコ、コケッコとけたたましく鳴き出す）あ裏の家で鶏が卵を産んだ。

末吉 （やっと微笑を取戻して）さあ、書こうよ。

次郎 うん。……（まだ耳をすましている）谷の儀八爺さんの水車は、まだ水受けの箱が一つこわれたままだなあ。チョットなおしやいに、爺さん、いこじだからな。

末吉 そんなもの聞こえやしないじゃないか。

次郎 聞こえるよ。

末吉 嘘いつてら。あんなに離れているのに、此處まで聞こえるわけがない。谷の水車だぜ？  
次郎 だから、谷の水車さ。ギー、ゴトン、ギーゴトン、それから、チョット間が有って、ギー  
ギーといつてからドサンというんだ。ほらね。

末吉 そうかなあ。……（一心に耳をすまします。聞こえないらしく、縁板えんいたに耳を押しつける）…

…

次郎 ……（ジツと聞き入っている）

(間。……四邊はシーンと静かである)

末吉 (顔を上げて) 駄目だあ。遠くの方でキーキーという様な音はするけれど、何だか、よくわからん。

次郎 眼あきの悲しさだな、ハハ。實は俺も眼おれが見えていた頃は聞こえなかった。

末吉 だけど、昨日あたりから、兄さんそんな事ばかりいってるじゃないか。音がそんなに氣になるの？

次郎 氣になるんじゃない、なんだか、なつかしくってしょうがねえんだ。俺あ、六年ぶりで、村の音を聞きに歸って来たようなもんだからな。でも、来る前に想像していたより、もっとズツト良いもんだなあ、生れ故郷の音というものは。

末吉 でも、これからいくらだって聞けるのに。第一、兄さん戻って来てから十日の上もなるのに、急にそんな事いうの變だよ。

次郎 だって、こうして一人で静かにして置いとかれるのは、やっと昨日あたりからだぜ。来てくれるのはありがたいけど、親類や村の人達が、あんなに次々とやって来てくれるのも、チョット迷惑だよ。

末吉 みんな兄さんに對する氣持から来るんだよ。青年團でも、何かしようとか今相談している

らしいや。……とにかく、みんな誠心誠意なんだから。

次郎

そりゃ、わかってる。俺みたいな者を、それ程考えてくれて、済まんと思ってる。しかし、當分ソットして置いて欲しいんだ。俺なんかにかまわないうで、ソツとして置いてほしい。ほかにする事がウンとある時だ。……それに、いくら同情されたり、いたわられたりしても、これ、どうにもなるもんじゃないんだ……自分の量見だ。自分の量見は、俺だけで、俺一人でなんとか片をつけないじゃ、これどうにもならん事だ。そいつが何とかならんと、出るにしても引くにしても、なんともならん。……盲になったのは、この俺だ。他人じゃないんだ。

末吉

そ、そ、それ、兄さん、それ、どういう意味なんだよ？ そんな風に、兄さんが、變に一人ぼっちみたいないな気になるの、僕あ——（少年らしく昂奮して突っかかるように）僕あ、そいじゃ、どうすりゃいいんだ！ そんな、そんな風に兄さんが——

次郎

いいよ、いいよ、末。わかってる。お前の氣持はわかってる。相變らず直ぐムキになるなあお前は。（微笑にまぎらして）ハハハ、馬鹿だよ。

末吉

だってさ……。

次郎

さてと、じゃ、書いて貰うかな。いいか？ ユツクリいうからな。

末吉

（まだ口の中でブツブツいいながら紙の上にかがみ込む）うん。

次郎 俺のいう通りに、黙って書いてくれよな。どんな事を俺がいつでも口出しをしないでソツクリそのまま書くんだよ。いいな？

末吉 いわない。いつも、なんにもいやあしないじゃないか。

次郎 よしよし。……わからん字はひらがなでいい。……いいかい？（考え考え口述をはじめる）

「その後も、お元気で働いていられる事と思います。……（少し待っていてから）この間来て下さった時も、その前の時も、いつもいろんな人が来ていたために、何も話が出来ず残念でした」……いいか？……（末吉は夢中に書いている）「先日から僕の所に来てくれる人で、いつも黙っているのは谷の水車の儀八爺さんとあなたの二人だけです。儀八爺さんの黙り屋は昔からの癖だから、不思議には思いませんが……あなたが殆んど口をきかれないのは、なんとなく氣にかかります」

末吉 ほ、と、ん、ど……。誰に出すの此の手紙？

次郎 そらそら、今いったばかりだぞ。

末吉 口出しとは違うよ。それに、しまいまで書けば、どうせわかる事じゃないか。

次郎 だから、いいじゃないか。黙って書けよ。……「家の者に遠慮なさっているためとも思いますが、……遠慮だけでなく、何か考えていられる事があるためではないかという氣も

するので、今日は弟に頼んで、少し長い手紙を出します」

末吉  
(書きながら) ……いられる事がと、あるためではないかという気も……廻りくどいなあ。

次郎  
そこで行を變えてくれ。……「僕も、こんな風になってから、二年近くなり、近頃ではスツカリ馴れて氣持も落着いています。盲目の世界も、はたで考える程不自由なものでも、寂しいものでも、ありません。……それに皆が自分に對して、あまり良くして呉れます。ホントに、自分を顧みて、ありがた過ぎる氣がします」……あまり早すぎるか？

末吉  
ううん、大丈夫だ。……(ペンの音を響かせて書き取って行く)

次郎  
……「特に家の者が、僕に心配をかけまいとして、タンボの仕事や家計のことで、僕には知らさぬようにして、一所懸命になっているのが、すまなくて、たまらなくなっています。父は唯一つの楽しみの晩酌も、やめてしまったらしいです。……父も兄も嫂も今日も早くから、畑に出て行き、弟も、これを書き終れば行くといっています。……兄も嫂も、身體が弱く、兄はジンゾウが悪いし、嫂は妊娠中です。……以前の通りに僕が中心になって、畑仕事をやれさえすれば……」

末吉  
(セッセと書取っていたが、不意にカラリとペンを置いて) いやだ、俺あ！ チエツ！  
次郎  
どうした？ 何がいやだ？

末吉　こんな事、なぜ書くんだい？

次郎　なぜって、……俺の思っている事を、正直に書いているんだから――

末吉　兄さんが、なぜそんな風に思う必要があるんだ？　お父つあんにしたって、兄さんにし

たって、嫂さんにしたって、そんな、兄さんがこうしているからって、何も無理をして働いてるんじゃないんだ。僕なぞ、兄さんのことを――これから僕が兄さんの分まで働く氣でいるんだ。そいでも家が苦しけりゃ、町へ出て職工になってもいい。それを、それを兄さんのいう事を聞いてりゃ……俺あ、いやだ、そんなの！

次郎　そうじゃないんだ。そうじゃ――

末吉　そうだよ！　なら、なぜそんなに濟まながるんだ？　全體、兄さんは、自分の眼がなんでも取られたんだと思ってるんだ！（兄が口をはさもうとするのをいわせないで押しかぶせて口をとがらせていい續ける）もっと、何もかも僕達にまかせて、兄さんはノンキにしてりゃ、いいんだ。なんかしたくなったら、どっかへ行きたくなったら、俺がおぶって行く！

次郎　（少年らしい生き一本な弟の愛情をかわしかね、へきえきして片手で空中を掻きまわしながら）いいよ、いいよ。俺が悪かった。

末吉　全體、誰に出す手紙かしらんけど――

次郎 もう、いいったら！ じゃ今んところ取消した。(微笑) いや、皆があんまりヤイヤイ  
つてくれるんで、固くなっちまうんだなあ。

末吉 固くなる必要なんかはないよ。ノンビリ歌でも歌ってりゃいい。

次郎 ハハ、歌か。……だってお前だって、固くなってやしないか？ お得意の馬鹿ぼ囃かし、まだ  
一度も踊らんじやないか？

末吉 ひよっとこ踊りなんか、つまらんよ。……(考え込んでうつむいている)

次郎 ……踊ってくれても、俺にや見えん。お前が踊らないわけは、それなんだ。ハハ、まあい  
いさ。……儀八爺さん、笛は吹いてるかい？

末吉 吹かん。いつも腰に差しちやいるけど。……

次郎 儀八爺さんの馬鹿囃しも聞けん……

末吉 ……しかし、なんだな、お爺さんの黙り屋の變りもんには今に始まった事じゃないけど、  
どうしてああマジマジと兄さんの顔ばかり見ているんだろうな？

次郎 そんなに見てるか？……今日もそこいらに来て、坐ってるんじゃないか？

末吉 (その邊を見まわして) いや、今日はまだ來ない。

次郎 なんしろ、足音も立てないでやって来て、石ころの様に黙ってるんだからな、居るか居  
ないか、わかりやしないや。……さて次を書いておくれよ。

末吉 よし、じゃ今んとこ消すよ。(ガサガサ消す)

次郎 すると、どこから續くんだっけ？ 見ろ、お前がグズグズいうもんだから、ゴチャゴチャになっちゃった。

末吉 もういわん。……ええと、「自分を顧みて、ありがた過ぎる気がします」の所までだ。

次郎 まあいいや。……いうよ。行を變えてくれ。……「眼が見えなくなってから、僕には、今まで見えなかった事が、いろいろ見えて来るようになりました。……皆が同じく僕に良くして呉れるうちにも、それぞれのやりかたが、いかにもその人でなければいけない様な、やりかたが有ることに氣が附いて、面白いと思います。……谷の水車の儀八小父さんなど、毎日の様にやって来て呉れても、何一言僕に聲をかけるではなし、ただ遠くの方から僕の顔をマジマジと見守っているだけだそうです……」

(いっている所へ、白い粉をかぶったハンテン着に藁草履を穿き、ひどいビッコを引いた爺さんが、火の消えた煙管をくわえたまま庭を廻って出て来て、二人の方を見ながら縁側のズツと端の方に音もさせずに腰をおろす。腰に差している古い横笛。態度も顔付もノンビリした老人だが、言葉を忘れてしまった様に最後まで無言だし、それに、感情を顔に現わすという事がなく、まるでお能の面の様に、ほしかたまったような無表情である。僅か

に眼の色だけが時に明るくなったり暗くなったり、稀れに笑いの様な影を現わすだけだ。今も、その暗い眼つきで次郎の顔をジッと見ながら、不自由な脚をいたわる様に縁側にあげて、あぐらをかいて坐る。猫の様に音を立てないので、次郎は勿論もちろん氣が附かぬ。末吉も夢中で筆記しているのと爺さんの坐った位置が末吉の眞後ろのズツと離れた所なので、氣が附かない。……この間も次郎の口述はポツリポツリと續いてゐる)

## 次郎

「……小さい時から、僕は小父おじさんを好きでした。小父さんも僕を好いていてくれました。……そして、小父さんは、今、僕の事を心配してくれているんです。……昔の自分の身にひきくらべて、僕の氣持の据え所のことを……僕が自分の量見をどんな風に据えるかと、ハラハラしながら心配してくれています。……小父さんが一言もいわなくても僕にはそれが手に取るようにハッキリとわかります……小父さんは、馬鹿囃しの笛の名人で、村の小若連が茶番狂言の稽古をする時には、いつも笛を吹いたものですが、近頃ではフツツリと吹かなくなりました。……僕の所に來てくれる村の人達は皆、僕を激励してくれたり、慰めてくれたりしますが、小父さんだけは、そんな事は一言もいいません。……黙り屋のせいだけではないのです。小父さんには、そんな事はいえないのです。僕のことをシンから心配すればする程なにもいえないのです。(末吉は懸命に書き取

っている。そのペンの音が四邊の静けさをかえってハッキリさせる。儀八は煙管きせるをくわえたまま次郎をマジマジ見守っている。……小父さんは僕を見てみると、自分の古疵ふるきずが痛むのです。小父さんには他人事ではないのです。……儀八爺さんは日露戦役の傷兵です。脚と、それから腰もやられているそうです。なんでも疵なほが治なほって歸なほって來てからも、永い間腰が立たなかったそうです。村では、かなり良くしてやって、腰が立つようになると、百姓仕事も出來まいというので、皆で水車を建ててやったりしたそうです。ボツボツ働いていさえすれば、食べて行くのに不自由はなかったと思います。……しかし時勢も今とは違っていたらしく、三年五年と日が經つ内にはつらい事もあつたらしいです。それまで一緒に暮していたおかみさんと夫婦別れをしたのも、その頃だそうです。子供が出來ないからというのだったそうですが、ホントの事はわかりません。……小父さんが急に人と口を利かなくなってしまうのも、その時分からだそうです。ですから、小さい頃から僕のおぼえている爺さんは、黙りこくった男で、笛ばかり吹いて、僕等を相手に馬鹿囃しを教える時位にヤットにこにこしていました。……僕は今度村へ戻つて來て、ヤットその頃の小父さんの氣持が身にしみてわかるようになりました……ひがんで見たり、ひねくれたり、うらんだり、又、悲觀する氣持ではありません。そんなものではないのです。僕にはうまくいえませんが、……つまり、生きて行く上の腹がまえがス

ツカリ變つてしまふんですから……今までの量見が、根こそぎなくなり、そんなものが、なんの役にも立たなくなってしまうのです。……つまり今後生きて行く上での安心立命というか——」……（言葉をとぎらせて考えている。その盲いためし兩眼が儀八の方を向いている）

末吉 ……（セッセと書きながら）なんの役にも……安心リツメイのリツというのは？

次郎 立つという字だよ。立つ命だ。……いや、そこんとこ消してくれ。僕にはうまくいえませんがの所から消してくれ。

末吉 うん……（消す）そいから？

次郎 ……「今も、小父さんの水車の音が僕には聞こえて來ます。しっかりしろ、早く、立ち直ってくれ、俺の様にはなるな、俺の様にはなるな……小父さんが心の中でそう念じて呉れているのが、僕には手に取るようにわかります。……ありがたいと思います。……しかし、僕は馬鹿なのか、又、特別に我慾が強いのか、いつまでたっても、僕の腹はホントにきまりません。……病院でもお願いして、眞宗の講義やキリスト教の説教も何度も聞かせていただきましたし、それから、禪宗の偉い老師が二ヶ月も來て下さって話して貰った事もあります、結局、迷いが取れません。……何かわかる様な氣がする時もあるが、もう少しの所で、わからなくなってしまいます。……僕はもともと生れつき馬鹿な

のでしよう。それが眼が見えたところは氣が附かずに居られたのが、盲目になったために、急に飛び出して來たのだと思います。……戦争のためではありません。僕はおそかれ早かれ、こんな馬鹿な自分の正體にぶつかって、迷って苦しまなければならぬ性質を持っていたのです。つまり運命なのです。……どんなに苦しくとも、僕は宗教だとか、他人の手を借りずに自分一人の力でこの運命と戦って行かなくてはならないのです。……それだけの決心はつきました」

末吉 ……ホントに、これ、誰に出すんだ？

次郎 黙って書いてくれ。頼むから黙って書いてくれ。

末吉 だって、こんな事書かなくなつたって、いいじゃないか。

次郎 書かなくちゃならんだ。それを書かんと、後の話がわからんだ。

末吉 そんなら、その人にこんだ會つた時話せばいい。

次郎 ロではチョットいえねえんだよ。……お前書くのがいやか？ いやなら、ほかの人に頼む。

末吉 いやじゃないけど、つらいんだよ。僕あ……僕あこんだけ兄さんの事を思っているのに兄さんの苦しい氣持を半分でも分けて貰えねえと思うと――。

次郎 ハハハ（寂しく笑って）馬鹿なことをいう。……とにかく頼む。こりや大事な手紙だか

ら。

末吉 ……（しゅしゅ又紙の上にかがみ込む）そいから？

次郎 行を變えて。…「ただ、今まで生きる上のメドにして來たものを根こそぎなくした所から、生きて行かなければなりません。どうして見當を附けて行けばよいか？…眼の事ではありません。自分の量見のことです。…僕には何もかも、よくわからないのです。ただ、僕にわかっている事は、今迄自分が持っていると思っていた物を一切合切捨ててしまつて、ホントの赤ん坊のように何一つ持っていない所から出發する外に手はないということですよ。…一度、一切を捨て切つて、赤はだかで立ち直る外に手はないという事です。一年間、考えに考えつづけた末、それだけは近頃僕にわかつて來ました。それで…」

末吉 ……（ガサガサと書取りつづけ、やっと書き終つて持ちあげた顔が眞青に緊張している）

兄さん！

次郎 なんだ？

末吉 俺あ反對だぞ！

次郎 ……なにが？

末吉 そんな、そんな兄さんの氣持は、個人主義だよ！ 僕あそう思うんだ。普通の個人主義

とはチツト違うけど、でも個人主義だよ。自分だけの利益や、自分だけの楽しみのために、ほかの人の事を考えないというのが普通の個人主義だが、しかし、みんなのために犠牲になった人間が、そのために不幸になったり不自由になったりした自分のことを、自分一人だけでなんとかしようとするのも、個人主義だ。……僕あ、まちがっていると思う！

次郎

……（今度は弟の抗議をはぐらかさないで正面からガツシリと受けとめて、しばらく考えていたが、やがてシンミリとした調子で）……お前のいう通りかも知れんな。だけど、せいじゃ俺あどうしたらいいんだよ？

末吉

……（いきなり何かいおうとするが、いえない。イライラして兄の顔を睨みつけ、口をモガモガさせている）……。

次郎

……お前の気持は、わかる。……しかし問題は俺だ。俺あ、いっそ、はたからこんなにかたわって貰ったりしない方がよいとさえ思う。気が引けてしようがないんだ。盲に生れ附いたと思やあいなんだ。……強く生きて行けるもんなら、はたから何をして貰わなくても、チャンと生きて行けるんだ。問題はそんなことじゃないよ。……第一、お前はすぐギセイというが、俺なんぞがそんな事いったら、両手兩足もぎとられたり、いや、死んじまった何十萬——現にお前、この村にだって、どいだけ有るかわからん、中には一けんの

家で二人も息子がとられちまったうちだってあるんだ——そんなところでは、どうなるんだ？……戦争の事あ、いまさら、なにもいいたくない。またなにも俺にやいえはしない。ただ、戦争をしたなあ人で、自分はただギセイになっただけだというふうに分だけキレイな口をきいてなんぞおれないんだ。ボンヤリしてて、人の尻馬に乗って、あんなばかな、まちがった戦争に引きずられて行ったのは、やっぱり自分なんだからな。

末吉

そりや……そりや、戦争はまちがって居た！ 今後もう、どんな事があっても、もうイヤダ！ しかし、それだからといって——いや、それだからこそ——つまり、これから戦争なんか引きずられないために、兄さんやそのほかの、戦争でいためつけられた人たちの事を、おれたちは、自分たちみんなの事がらとして考えて行かなきゃならないんだ！（突っかかって行く。儀八は黙々として聞いている）そう思うんだ俺あ！ それにだよ、今度の戦争が正しくなかったから、戦争のギセイになった人もうっちゃって置けというリクツはないんだ！ それとこれとは別だ！ おれたちがギセイになった人たちの事をシンから考えてやって行く事を遠慮することは、いらんと思うんだよ！

……わかるよ、わかっている。俺のいってるのは、それとは、べつなんだ。……ほかの人がどんなに自分のために考えてくれてもだ、それとはべつにだな、自分だけで始末しなきゃならん事が人間にや有るんだ。

次郎

末吉 な、な、なぜ兄さんは、そんな自分一人で寂しい事ばかり考えるんだ。

次郎 寂しくないじゃないか。……それとこれとは問題が違うんだ。俺はこれからシツカリと

生きて行こうとしているんだ。

末吉 だから、それには僕も大きい兄ちゃんもお父つあんも、嫂ねえさんも、そいから兄さんの力

に喜んでなっ行って行こうとする者は、いくらでも居るのに、兄さんは自分一人で――

次郎 そうじゃないといったら。俺は自力じりきで生きて行かなくちゃならんだ！ 実際上は結局

みんなの世話になるだろうが、しかし、世話になろうとする量見が少しでも有っちゃ、

とても腹は据わらんだ。それをいつているんだ。……俺あ今後、誰の重荷にもなりたくないんだ。

末吉 そ、それだ！ 兄さんは、それだ！ 兄さんの本音ほんねは、それだ！ 兄さんは馬鹿野郎だ

っ？ 俺あ、そんな重荷だなんて、そんな――（くやしさと悲しさにこらえ切れず、聲を

あげて泣き出す）

次郎 泣くな。

末吉 馬鹿だ！（泣く）

次郎 泣くなといったら。末！……わかってるんだ。……泣くのよして、次を書いてくれ。

末吉 俺あ、こんな手紙書くの、もう、いやだ！（ペンを投げ出す）何がクソ！

次郎　　そうか。じゃ頼まん。……こりや俺には大事な手紙だ。どうしても一度は書かなきゃならん手紙だ。それに、チョットほかの人には頼めん。だけど、お前がいやなら仕方がない、誰か捜す。

末吉　　……（次第に泣きやみ、寂しそうな兄の顔を見ている中に投げ出したペンを取り上げる。掌で涙を拭きながら、紙の上に再びかがみ込む）書くよ、兄さん、書くよ。

次郎　　そうか。そうしてくれ。その代り、あとは極く簡単にいう。十行か二十行だ。いいかい？  
末吉　　うん。

次郎　　……「それで、こんな事をいうと、非常に出しぬけの様ですが」（考えている）……「僕としては、今迄考えに考えた末ですから、そのつもりで読んで下さい」……「僕は、この際あなたとの結婚の約束を、一應、取消したいと思えます」

末吉　　（びっくりして）あ！　夏子さんか——！

次郎　　何もいうな！　黙って書け！　なんかいったら承知しないぞ。黙って俺のいう通り書け！　（兄の言葉の強さに末吉は威壓されて何もいえず、左手で頭をおさえている）いか！　「くだくだしい理窟や、氣持など、私は此の際、一切いたくありません。……いっても仕方がありません。ただ、永い間僕に盡して下さったあなたの氣持に、しんから感謝いたします。……こんな手紙を差し上げると、……うぬぼれかも知れませんが……

あなたを悲しませるかも知れないとも思いましたが、われわれは今、そんな一時的な悲しみなどの事をいっていられる時ではないと思います。どうか、そんな悲しみから一日も早く立ち直って、僕の事など考えず、すべてを自由に考えて下さって、元氣よく幸福にやって行って下さるよう、心から祈ります。……僕に對する一時の感情的な同情のため、あなたは、自分をいためてはなりません。……僕には今後一人で行くだけの力は既に出来ています。……あなたは自由です。……どうか（プツンと口述がとぎれる）

末吉 ……（齒を食いしばって書き終って、兄の顔を仰ぐと次郎は見えない眼でジツと遠くの方を睨むにらような顔をしている。その視線の先には黙々たる儀八が居る）……兄さん。

次郎 ……。

末吉 こりや、口出しをするんじゃないだよ。口出しをするんじゃないけれど、夏子さんはそんな人じゃないよ。……そんな女じゃ絶対にない。わかりきっているじゃないか。兄さんが出征して以来、約束を守って、ああして夏子さんがチャンとして働いて……内の加勢などにもしよっちゅうやって来てくれたりしてるの、知ってるじゃないか兄さんだつて！……（次郎が返事をしないので仕方なく）夏子さんが此の前やって来た時に、あんまり黙っていたので、それで、兄さんはそんな風に考えたのかも知れないが、あんな

にたくさん人が詰めかけている、遠慮はあるし、お茶を出したりなんかしなきゃならんで忙しいし、口をきいている暇はない。

次郎　いい。……もう、いい。

末吉　口こそきかなくなつて、兄さんを見ている夏子さんの顔を一目でも兄さんが見られたら、こんな事をいえる道理がないんだ。

次郎　違うんだ。俺はそんな事をいつているんじゃないよ。

末吉　ひがみ根性こんじょうだ兄さんの。

次郎　ひがんでなんか居ないよ。お前にや、よく解らんのだ。ひがみ根性とは、まるっきりあべこべの氣持だ。

末吉　でも俺あ、こんな手紙出すの、いやだ――

次郎　まだいうか！　俺がこれほど眞剣に頼んでいるのに、貴様まだグズグズいうんだたら――。

末吉　（兄のけんまくにビックリして）出すよ。出すにや出すけどさ。……

（あたりの静けさの中に、儀八が口の中でブツブツ何かいいはじめた聲が聞こえる。聲が低いし煙管きせるをくわえたままだし、何をいつているかはわからないが、次郎は耳ざとく聞き

つける)

次郎 ……誰だよ、そこに来たなあ？

末吉 (これも振返って)なんだ、儀八小父さんじゃないか、びっくりさせるよ。いつ来たの？

儀八 ……(返事はしないで、煙管きせるを口から離し、トントンと縁側で吸いながらを叩いて、新しく煙草を詰める)

次郎 小父さん、毎日済まんなあ。

儀八 う？…うむ。(マッチをすって煙草に火をつける)

次郎 一度、笛を聞かせて呉れんかなあ。頼まあ。

儀八 よしにしとけ。つまらんよう。…。(又黙々として煙草を吹かしている)

(そこへ、少し離れた所から響いて来るパパパン、パパパン、パパ、パン、パンパンという音。はじめ何の音ともわからぬが、次第に近づくに従って、それは洋式の小太鼓を、バチで叩く音であることがわかって来る。音は人の歩調に合せるような一定のリズムを取って、近づいて来る)

次郎

……なんだ、あれは？（儀八も末吉も耳をすましている……間。小太鼓の音は元氣よく益々近づいて来て、それと共に歩いて来る多勢の人達の氣配や足音まで聞きとれる程になる）

末吉

ああ、来たな！（いうなり、書き上げた兄の膝の方に押しやって置いて、パツと庭に飛び降りて小走りに庭を廻って消える。その間にも小太鼓の音と人々の足音と氣配は近づき、此の家の門口まで来ると、誰かが「止め！」と號令をかける聲がして、小太鼓の音が停止する。……それらの氣配を次郎も儀八も黙ったままで聞いている。短い間。……末吉、ニコニコしながら、門口の方から此方こちらに戻って来る）兄さん、青年團のバンド（その附近の團體が實際に出演してくれた場合は、その實際の名をいう。以下、地名、人名、團體名、その他の固有名詞は、さしつかえない限り、實際の名をいうこと）が来てくれた！なんかやって聞かせて呉れるそうだ。そいから、學校と、そいから有志の人達も一緒だ。そうか。

次郎

（いつている間に、プラス・バンドを先頭に門口の方から庭を廻ってゾロゾロと入って来る人達。人数は適宜でよいが全員で二十人が最も好適であろう。バンドは十人位の青少年から成って居り、全員粗末な制服をキチンと着て、各自樂器を持ち、一人の指揮者から引率いんそつ

されている。この指揮者は最後まで奏樂の指揮だけでなく、此處にやって来た二十人ばかりのプログラム全體の司會者兼進行係りを兼ねる。バンド以外の訪問者十人ばかりの中には、お婆さんが一人、若い女の人が一人、村役場の助役さんといった様子の袴はかまをはいた老人が一人、野らからたった今あがって来たばかりといった様子で手拭てぬぐいをスットコかぶりにしたままの中年過ぎの農夫が一人、町の女學校の三年生に通っているといった年かっこの制服の女學生が一人、そして残りの三四人はまだ低年級の小學校の女生徒達。全員の様子は形式張らず素朴きわまるもので、以下行われる演奏も唱歌も演技も、決して洗練されたものではないが、眞率な自發的なものであり、全員が殆んど知り合い同士か顔見知りのため、全體に儀式張った固苦しさはなく、ただ眼の見えぬ人を面白がらせようという誠意と、なごやかさにあふれている。實際に於て、多少のしくじりが有っても構わぬから、進行係りの機轉でドシドシ、迅速に運んでやる。

指揮 緒方さん、今日は。こないだの晩は失敬。

次郎 やあ會津君あいつか。どうもわざわざ――

指揮 いや、わざわざといわれちゃ、却かえって恐縮だあ。丁度今日はバンドの練習日できてね。

チヨット時間が有ったもんだから、あんたに一度、こんなものが出来たって報告かたが

た行こうじゃないかって皆がいうもんだから。そしたら、丁度來合せていた杉田さんやなんかも來るといいうしね、そのほか、學校からも來てくれるし、古賀さんこの妹さんや、直吉の小父さんまで途中から附いて來てくれた。なんの事もない、ここいらの藝人が揃っちゃったんで、これじゃ一つ緒方さん所を手はじめに、四五軒慰問に廻ろうといっているところですよ、ハハハ。

次郎 ありがとう。皆さん、すみませんねえ。

老人 やあ、今日は固苦しい話は抜きじゃ抜きじゃ。おお、水車の儀八公も來ているじゃないか。

儀八 杉田さんでがすか。今日は、いいあんべえで——（いいながら、遠慮して縁側の曲り角の邊へ身をさがる）

中年 （次郎に）次郎君どうだ、かげんは？

次郎 直吉の小父さんでがすか。どうも——

中年 いやあ、畑に出ていたら太鼓が鳴るでね、たまらなくなって飛び出して來たよ、アツハハ。

次郎 おい末、皆さんにお茶を、そいから、ざぶとん——

婆 いらん、いらん！ のどが乾きや裏い行って水飲む。ざぶとんなざ、みなこうして庭に

立ってるだから。

指揮

そうだ、そんなもんいらん。さ、始めるぞ。氣を付けっ！（バンド全員は位置に付き、樂器をかまえる）いいね、先刻<sup>さつ</sup>打合せた通りの順だよ。（次郎と他の人達に）練習未だ尙、日が浅く、まちがいましたら、お聞きのがし下さあい！（一同拍手）はいっ！

（自身も太鼓を鳴らしながら指揮。音樂はじまる。次郎と儀八の二人だけが縁側に坐って聞き、末吉は兄の近くの庭上に立ち、他の一同はラツパ鼓隊<sup>こたい</sup>を中心にして半圓を描いて斜めに縁側に向って立っている。曲は明るく楽しいものなら任意のものでよい。ただ固苦しい歌曲や、淺薄な時局便乗歌曲のたぐいは絶対にいけない。流行歌の中で明るく面白いものを編曲したものなど、好適であろう。あまり長くならないもの。……終る……一同拍手）

次郎

（ニコニコしながら）うまいもんだ。

指揮

次は？

女生徒一

あたいたち！

指揮

そうだ。（バンド員の一人に）加藤君、クラリオネットで付けてくれ。そら、ひのふのみ！春が来た、春が来た……（いきなり女生徒三四人が一齊にその歌Ⅱ別の歌でもよいⅡを歌

い出し、進み出て来て、いたいけな手足を動かし踊りはじめる。クラリオネットが伴奏する)

女生徒 どこに來たあ。……山に來た、……里に來た、野にも來たあ……。 (更にもう一度) 花が

咲く、花が咲く、どこに咲く……。 (歌い踊り終る。一同拍手)

老人 やあ、うまいうまい。みんな、いい子だのう! (女生徒達の頭を撫でてやる)

指揮 杉田さん、今度はあなた、どうぞ。

老人 ようし。…… (威儀を正して咳一咳する。一同拍手) エッヘン! (いきなり歌い出す。

ひとがら人柄から謡曲でも出るかと思うとそうではなく、トテツもない聲と節ふしである) 鳶とびや烏や  
雉子きじや雁金かりがね、やぶ鶯の共に鳴く音はね……グーケロリンノ、チリンツモリンノ、ホーホ  
ケキョと、鳴くわいな。(一同ヤンヤと聲をあげて拍手する。杉田さん喜こんで一つ二つ  
お辞儀をする)

中年 旦那、もういっちょよう! もういっちょよう!

老人 アツハハ。じゃ…… (再び聲を張り上げる) 雨はホロホロ……稲妻ビカビカ……かみな

りゴロゴロと、いうて、……抱きしめたが縁のはし。(一同拍手)

中年 たまらねえ! それ、なんの歌ですかね、ジョーロリかね?

老人 いやあ、都々逸とどいつじゃ。字餘り都々逸というてな。

中年　　そうかあ！　ジョーロりにしちや變だと思つた！　（頭を搔く。一同哄笑する）

老人　　ひどい事をいう。そいじゃ、やっぱし、お國ぶりを一つ出して、それでおしまい。（更に威儀を正して、歌い出す。今度は正調だし、うまい。ここには立山節たてやまぶしを書いて置くが、

適宜上演地方の古くからの民謡を歌う）……峰の白雪、ふもとの氷、今はたがいにへだてて居れど、やがてうれしく、解けて流れて、添うのじゃわいな、あの山越えて、逢いに來る。（一同拍手）

次郎　　杉田先生、ありがとうございます。

老人　　いやあ、ハハハ。さあ、次だ。（女學生に）あんたもやるんだろ？

指揮　　「庭の千草」でしたね？　（ラッパ鼓隊が伴奏する事になっていると見え、皆に合圖をする）

女學生　（進み出て）ええ。でも、私、下手へただけど。……

末吉　　（兄に）新道の古賀さんとこの徳枝さんだよ。

次郎　　へえ、徳枝さんが、そんなに大きくなったのか。

（言葉の中にバンドの「庭の千草」の伴奏がはじまる。女學生は器量一杯に歌う。うまい。歌い終り、一同拍手）

次郎

徳枝さん、ありがとう。なかなか、うまいや。(女學生顔を赤くしてコソコソと人の後にかくれる)

婆

きんらんどんすの帯しめながら……(いきなり歌い出しながら、歌に合わせて踊り出して行く。女の子のために振附けられた舞踊で、この老婆から誰も豫期していなかったものである。ワーツと人々聲をあげる。お婆さんは、しかし大まじめで、歌聲も手振足附も若々しく踊り抜く。小學生の孫からでもならったものと見え、動作から口附きに至るまで、ひどくあどけない)……花よめごりようは、なぜ泣きなさる……(誰かがそれについて歌い出したのをキツカケに、一同の齊唱となり、それに樂器も鳴り出し、元氣一杯に踊りおさめる。一同拍手)

婆

やれやれ、腰が病めるぞ！(人々笑う)

指揮

ハハハ、ところで、儀八の小父さん、お前も嘸しはやを一つ頼むよ。

儀八

やあ。……(吹こうとしない)

末吉

小父さんが笛を吹いて呉りや、俺も踊る。面を取って来るからな。

儀八

よしにしろ。つまらねえ。(一同の調子に乗って行こうとはせず、尻ごみをして角かどの障子のわきに、にじりさがる)



不機嫌という程でもないが、やっぱり無表情で煙草を吹かしている)

指揮

これでおしまい。次郎さん、疲れるとよくねえ。では最後に、もう一つやり、やりながら行進に移る。(ブラス・バンド一同に) いいね? はい! (自ら小太鼓をパパパン、パパパ……と打ち鳴らす。ラッパが鳴り出す。やがて各楽器が有りったけの大きな音を出す行進曲がはじまる。恐ろしく元氣よく、やかましい。……曲の真中あたりで) じゃ、お大事にね次郎さん。失敬しましたあ! (いいながら、奏しながら先頭に立って、入って来た門口の方へ庭を出て行く。バンド一同も、それに従って来てた人達も歩調を合わせてドンドン出て行く)

婆

又来るで。大事になあ!

次郎

(頭をさげながら) ありがとうございます存じました。

老人

ちと、役場にも遊びにおいで。

次郎

はあ、ありがとうございます。

(次郎と儀八を残して、皆出て行ってしまふ。バンドの音は吹奏をつづけながら路に出て行き、角<sup>かど</sup>を曲り次第に小さくなり、やがて遠ざかって行く。……間。次郎と儀八、黙々とし

て相對している。……やがて吹奏の音も消え、静かになる。今迄にぎやかであっただけに、最後の行進曲がやかましかっただけに、その後の静けさが身にしみる様に強く感じられる)

次郎 ……儀八の小父さん。

儀八 ……(返事をせぬ)

次郎 小父さん……(儀八答えず)……行っちゃったのか。(寂しそうに一人ごと)

(短い間。……そこへ一同について表に行っていた末吉が戻って来る)

末吉 ああ面白かった。良い人ばかりだなあ。

次郎 うむ。みんなああして、わざわざ来てくれる。ありがたい。ホントに俺あ……しっかりしなくちゃならん。(手紙をいじっている)

末吉 だけど、急に行っちゃまわれると、あとが馬鹿に寂しいね。まるで潮が引いて行っちゃまったようだ。

次郎 儀八爺さんも一緒に行っただな？

次郎 う？…（背後を振り返って見るが、儀八は先程庭先の演藝が始まる時に皆に遠慮して坐をしぎって縁側の曲り角を少し曲った所に坐り直しているの、末吉の所からは眼に入らぬ）…うん、行っちゃった。

次郎 …（手紙を出して）これ、もう少しだ、書いてしまってくれ。

末吉 うむ…（ふしようぶしように再びベンを取る）

次郎 どこまで書いたっけ？ 今の騒ぎでメチャメチャになっちゃった。すまんけど、読み返してくれないか。

末吉 初めから？

次郎 そうだな、いや初めの所はいいから三分の二位の所から。

末吉 ホントに、兄さん、俺、頼むから、この手紙出さないでくんねえかなあ。兄さんは考え過ぎると思うんだよ。…夏子さんはそんな女じゃない。ああして町のハタ場なぞに働きに出るようになったのも、兄さんと一緒になる準備のためだと思うんだよ。

次郎 …いいから読み返してくれ。

末吉 …（何といっても兄が受付けそうになく、あまりくどくどいうと又怒りそうなので、しかたなく、読み返しはじめ）…ええと、じゃ読むよ。…「しかし僕は馬鹿なのか、特別に我慾が強いのか、いつまでたっても、僕の腹はホントにきまりません」――

次郎　　チヨ、チヨット待ってくれ。

末吉　　ちがった？

次郎　　いや……（四邊あたりの静けさに耳をすまして何か聞いている）あれ、なんだ？

末吉　　なんだよ？……（自分も耳をすまして）……又、水車かい？

次郎　　違う、水車の音はチャンと聞こえる。別だ。ほら、トントン、パタリ……森の角の邊の家かな？　お前にや聞こえんのか？

末吉　　聞こえんなあ。……ああ、ヤット聞こえる。ありやハタを織ってんだ。

次郎　　え？　ハタ？　近頃、ハタを織るようになったのか、また？

末吉　　うん、方々の家で、以前使っていた古いハタを引っぱり出して織ってる。内でも嫂ねえさんが少し暇になったらやるんだって、こないだ手入れをしていたよ。ありや、死んだおっ母さんが使っていたんだってね？

次郎　　そうか。……そいで、何を織るんだ？

末吉　　銘仙だとか、絹と毛を混ぜた大幅物おおはばものだとか、そいからホームспанなども織る。材料を持たぬ家には町のハタ場から貸して呉れて、織れたのは検査してハタ場で引取ってくれるんだよ。縣でも農家の副業に奨励金など出してくれるんだ。そいで助かっている家が随分あるんだよ。そうだ、夏子さんの働いている工場でも此處ここいらにかなり仕事を出し

ているんだよ。

次郎

そうか。……いろいろなになるもんだな。あんな古い道具が、今頃になって又使い道になるのか。……そうか。(音に聞き入っている。おさの音は、微かに、しみ入るような響でトントンハタリ、トントン、ハタリと流れて来る)……

末吉

……(これも、思わず聞き入っていたが、フトわれに戻って)じゃ、又讀むよ。

次郎

チョ、チョット待ってくれ。……(なおも耳を澄す)

末吉

どうしたの？

次郎

ああ、いや、……讀んでくれ。

末吉

「病院でもお願いして眞宗の講義やキリスト教の説教も何度も聞かせていただきましたし、それから禪宗の偉い老師がニカ月も来て下さって話してもらった事もあります。結局迷いが取れません。……何かわかるような気がする時もあるが、もう少しの所でわからなくなってしまうです」

(ユツクリ讀みつづけている所へ、門口から、庭を廻って夏子。質素だが小ざっぱりした着物に草履を穿いた落着いた美しい女である。いったん門口から案内を乞うても誰も出て来ないので庭口へ廻って来て見たらしい様子。手に次郎へのみやげ物をさげている。不意

に現われてワツと行って次郎をびっくりさせようとも思ったのか、足音を盗んで、いたずらそうにニコニコしながら庭の入口の所まで来るが、末吉が手紙を読んでいるので聲をかけるキツカケをなくして、黙って立って、笑いそうになる自分の口を片手でおさえたりしていたが、次第に手紙の内容に引き込まれて、まじめな顔になり、そのまま聞いていく。次郎は勿論、末吉もそれに気が附かない)

末吉

「……僕はもともしれつき馬鹿なのでしよう。それが眼が見えた頃は気が附かずに居られたのが、盲目になったために急に飛び出して来たのだと思います。……戦争のためではありません。僕はおそかれ早かれこんな馬鹿な自分の正體にぶっつかって、迷って苦しまなければならぬ性質を持っていたのです。つまり運命なのです」……聞いているのか、兄さん？

次郎

う？ うむ……（末吉からそういわれる程、彼は末吉の聲の間を縫って響いて来るおさの音ばかりに聞き入っている）……おっ母さんが——（無意識にいう）

末吉

え？

次郎

……（我れに返って）いや、読んでくれ。

末吉

「……どんなに苦しくとも僕は宗教だとか他人の手を借りずに、自分一人の力で、この

運命と戦って行かなくてはならないのです。……それだけの決心はつきました。ただ今迄生きる上のメドにして来たものを根こそぎなくした所から生きて行かなければなりません」……どうしたの、兄さん？

次郎 (うつ向いて、えりくびの邊を片手で撫でるような動作をしている) ……

末吉 くびが、どうかしたの？

次郎 ……(だまって同じ事を繰返している。おさの響は、トン、ハタリ……トントン、ハタリと流れて来る)

末吉 氣分でも悪いのか？

次郎 ……(尙もだまって、今度はえりくびから、着ている着物の肩から襟の邊を撫でる)

末吉 兄さん！ (此方に立っている夏子も、次郎の様子が先程から變なので心配になり、この時近寄って行きそうにする) 兄さん！ ホントにどうしたんだよ？

次郎 なんだい？ (やっと持ち上げた頬に、盲めしいた兩眼から涙が垂れ、光っている。夏子はそれを一目見ると、又動けなくなってしまう)

末吉 (びつくりして) どうしたんだい？

次郎 ……お前は小さかったから知らんだろうが、この着物もお母さんが織って呉れたもんでな……思い出しちゃった。

末吉 ふうん……でも、泣かなくなつたって、いいじゃないか。

次郎 泣いてやしない。(ニッコリ笑つて見せる)……讀んでくれ。(つとめて落着いてはいるが、

心の底で強く昂奮しているらしく、それを自らおさえるためか、足を伸ばし、縁先にぬぎ捨ててある藁草履を足先さぐりにして穿き、靜かに庭先を歩き出す。風の向きが變つたのか、おさの音は少し大きくなり、階調をなして流れて来る。次郎は首を傾けながら、それに聞き入りつつ、自分をおさえつけるような足どりで歩く)

末吉 (その兄の様子を眼で追っていたが)ええと、どこからだっけ。……「ただ、今まで生きる上のメドにして來たものを根こそぎなくした所から、生きて行かなければなりません。どうして見當を付けて行けばよいか? 眼の事ではありません。自分の量見のことです。僕には何もかも、よくわからないのです。ただ僕にわかっている事は」

(手紙の文句を聞いている内に、夏子は次第に泣けて来る。手で顔を蔽い、立って居れなくなつて、靜かにしゃがんでしまう)

末吉 「今迄自分が持っていた物を一切合切捨ててしまつて、ホントの赤ん坊のように、何一つ持っていない所から出發する外に手はないという事です。一度、一切を捨て切つて、

赤はだかで立ち直る外に手はないという事です。一年間、考えに考えた末、それだけは、近頃僕にわかって来ました。それで……こんな事をいうと非常に出しぬけのようですが、僕としては今迄考えに考えた末ですから、そのつもりで読んで下さい。……僕は此の際、あなたとの結婚の約束を一應取り消したいと思えます」

(夏子ギクリとして立ちあがる。思いがけない手紙の内容に、涙に濡れた兩眼をキラキラ光らせて、歩いている次郎のちょうど此方を向いている顔を、睨むようにジッと見つめる……)

次郎 ……(その夏子の立ちあがった微かな氣配に) 誰か来たのか? 儀八の小父さんか?  
(儀八は三人からは見えない縁側の曲り角の奥に、やっぱり坐って、くわえ煙管ぎせるで此方を  
見ている)

末吉 いや、誰も……(といいながら、振返って夏子を發見する。しかし夏子が「黙って、黙って」と手で制する。末吉はその夏子と兄の様子を見くらべていたが、つとめて平氣な聲で) やあ、誰も來ない。

次郎 そうか。……読んでくれ。

末吉

……（チヨット夏子の表情をうかがっていたが、仕方なく讀む）「くだくだしい理窟や氣持など私は此の際一切いたくありません。いっても仕方がありません。ただ永い間僕に盡して下さったあなたの氣持にしんから感謝いたします。こんな手紙を差しあげると、うぬぼれかも知れませんが、あなたを悲しませるかも知れないとも思いましたが、われわれは今、一時的な悲しみなどの事をいっていられる時ではないと思えます。どうか、そんな悲しみから一日も早く立ち直って、僕の事など考えず、すべてを自由に考えて下さって、元氣よく幸福にやって行って下さるよう、心から祈ります。僕に對する一時の感情的な同情のために、あなたは自分をいたためではありません。僕には今後一人でやって行くだけの力は既に出ています。あなたは自由です。どうか」……そこまでだよ。

（夏子は尙も、次郎の顔を見守っている。次郎の氣持がわかればわかる程、しかし思っても見ない心外な事を聞き、悲しみと怒りと愛情とが強くこぐらかつて、石の様になっている。その様子を末吉は、どうしてよいかわからず、ジツと見ている）

次郎

ええと、もう少し、……もう二三行書いて……（フツと言葉を切って、歩くのをやめ、これも石の様に立ったまま、益々高く多くなって響いて来るおさの音を聞いている。……

次第に頭が垂れ、うつ向いてしまう。そのうなだれた自分のえりくびの所を片手で撫でていた手が無意識のうちに、グツと首すじを掴む。……夏子も末吉も儀八も、次郎を見守ったまま無言。……永い間。さわやかな潮ざいの様に流れ寄って来るおさの音)

次郎 ……(フツと顔を上げ) そうだ。末、その手紙、やぶいてくれ。やぶいちまってくれ。

末吉 え? ……やぶく? ホントかい? (眼を輝かしている)

次郎 うむ。……いや、はじめの方はいいからな。後の、「こんな事をいうと非常に出しぬけのようですが」の所から、やぶいて捨ててしまってくれ。……そして、すまんけど、その代りに、もう少し書いてくれ。

末吉 いいとも! (手をふるわせながら、レターペーパーを二三枚やぶき捨てる) 夏子さんが、よろこぶ! よろこんで——。それで……それで、こんだ何て書くの?

(夏子、激動のあまり、立っているのにたえず傍の垣根につかまる)

次郎 ……いいかい? ……「昨日あたりからやっと、人々が詰めかけて来なくなり、こうして静かに坐っていると、氣持が非常に落着いて来ます。……遠くからおさの音が響いて来ます。……私には初め、それが何の音だかわかりませんでした。それほど遠い昔、小さい

時に聞いたぎりの音です。……それは人を、生れ故郷に連れ戻すかの様な、何ともいえない良い音です。……私はだしぬけに、まるで昨日の事のように、死んだ母がハタを織っていた姿を思い出しました。……それは僕の見えない眼の中に焼き付いているような感じがします。……末吉はやっと生れたばかりの赤ん坊で、僕はまだ九つか十位でした。母はその前から眼が悪くて、細かい物は見えないために、織物の糸目の数を僕に数えさせました。しかし僕は遊び盛りであつたのと、めんどろくさいので、なるべく逃げるように逃げるようにしてしまいました。……或る日のこと、學校から歸つて來ると、例の通りハタを庭に持ち出して織りにかかっていた母が、又糸目を勘定してくれといひます。……僕は友達の所に遊びに行く約束が有つたので、プンプンしながら、いかげんに數え上げて家を飛出して行きました。……夕方になって歸つて來ると、ハタに寄りかかたまま母がボンヤリと青い顔をしています。僕の姿を見ると、先程お前が勘定してくれた糸目の数はまちがっていたんじゃないかといひます。そんな筈はないと僕が答えると、でもなんだか織り違えて困ったといひますから、僕はもう一度勘定してみました。……まちがっていました。母が織り違えをしたのは、そのせいでした。僕は子供心にも濟まない氣がして、黙っていると、母は弱い聲で、やっぱりまちがっていたんだろぅといひ、しばらくしてから、母ちゃんは一反損たんをした、これを賣った金でお前と末ちゃんにいろ

んな物買ってやろうと思っていたら、だめになったよ、といいます。……叱るとい  
ではなく、とても悲しそうな聲でした。母はふだんから、めったに僕達を叱った事はあ  
りません。身體が弱いせいだったかも知れませんが、それよりも、生れつきその様なや  
さしい性質だったらしいです。……さすがの僕も母に對してひどく悪い氣がして、だま  
って織り損そこないの布目ぬのめを見ていたら、不意に、この襟くびの所にポトリボトリと水が垂  
れて來たので、ビックリして母の顔を見上げると、母は僕の肩にもたれたまま、聲は出  
さないで涙を流していました。……僕も急に悲しくなって泣き出しました。そんな事が  
ありました」……早や過ぎるか？

末吉

ううん（涙ぐんで、鼻をすすり上げながら懸命に書取って行く。……書き終って）書けた。

……死んだおっ母さん、そんな人だったの？

次郎

お前がまだ小さかったから、憶おぼえていないだろうな。……そんな人だった。……叱られ

るより、俺あ、悲しかった。……それ以來、俺あ糸目の勘定だけは念を入れてチャンとし  
たよ。おっ母さんがハタを織るのは、内の家計を助ける仕事だったしな。……（縁側に  
腰をかける。夏子は相變らず、垣根の所から次郎を見ている）……次ぎ……「それを今急  
に僕はマザマザと思い出しました。……思い出させてくれたおさの音に、僕はシンから  
感謝します。此處へ歸って來てよかったと思います。……何だか知れませんが、僕の心

の中はいつぺんに明るくなった様な、いつぺんにこだわりがなくなった様な気がします。……僕は今迄ホントに馬鹿でした。自分で自分をしばって身動きの出来ぬようにしていたのです。ひがみだといわれても仕方がなかったと思います。それに気が付きました。……なつかしい、なつかしい母は死んでしまって、今頃になってからも、僕達を守ってくれていたのです。……母はシンから僕達を愛してくれていました。愛しているだけで、僕達が母のいいつけに背そむいても、ただ愛してくれるだけで、僕達にああしろこうしろとはいいませんでした。僕がどうしても中學にあがらせて呉れといった時も、家計の苦しいのをミスミス承知で、とにかく三年まで行かせてくれたのも母です。それから僕がグレ出して東京に行き、病氣になって戻って来ると、よろこんで、いたわって看病して呉れたのも母です。……僕だけでなく、兄さんに對しても末吉に對しても、なんでも好きな事を自由にやらせ、ただ自分は靜かに僕達を愛して呉れていたのが母です。……つまり母は、愛するという事を知っているだけで、その代りとして自分が愛される事は少しも要求していなかったのです。深い深い愛情でした。……それが僕にやっとなつて来ました。……これは何も母親が子供に對して抱く愛情だけに限ったことではないと思います。どんな愛情でも、それが大きくなればなるほど、又深くなればなるほど、その愛する相手を自由にさせ、しばり附けたりしなれないと思います。又同時に、無理に自分から突

き離したりもしないと思います……」いいかい？……こんだ行を變えてくれ。……「實は、その、後の事を僕はやりかけていた所でした。……こんな事を書いて、……あなたには何の事やらわからないでしょうが、……とにかく、長々とつまらない事を書いて來ましたが、どうか許して下さい。……あなたに對する僕の氣持は以前と少しも變りません。いや以前よりも純になっています。……あなたさえよかったら、兄にも話し、遠からず式を擧げたいと僕は思っています。しかし、あくまで、あなたさえよかったら……あなたさえよかったです。この點を、どうか誤解しないで下さい。……あなたはあなただけの氣持で、自分の好きなようにそれを決めてくれてよいのです。……あなたは自由です。……單純に、僕を一人の人間、一個の盲目の男として見た上であなたの心を決めて下さい。僕の言葉には何の誇張も、何の嘘もありません。ありのままの氣持です。いろいろに、ひねくって取ったり、臆測したりして下さい、僕は一生うらみません。……そして、正直に、よく考えて、僕と一緒にやっけて行く氣がなかったら、あなたはだまって、もう此處には來ないで下さい。そして僕の事は忘れて、幸福にやっけて下さい。……もし、僕と一緒にやっけて下さるつもりになりましたら、一度來て下さい。何もいう必要はありません。だまって、遊びに來て下さるだけで結構です。僕には、それでわかりますから。では……」……ああ、もう、それでいいや。

末吉 ……（昂奮してガサガサと書き終り、夏子の方を見る）

次郎 疲れた。……名と、そこから封筒を書いといてくれ。町だろ、まだ。……お前も疲れたろう？

末吉 ううん。

次郎 ありがとうよ。……これでサツパリした。とても良い氣持だ。……あとは、夏子さんが自分で決めて呉れりゃ、いいんだ……。

末吉 ……（手紙を封筒の中に入れてながら）兄さんは、おっ母さんの事をハッキリ憶えていて、うらやましいや。……僕あ、なんだか、おっ母さんに會いたくなっちゃった。

次郎 そんな無理な事いったって。……お前にも心配かけた。俺が悪かったよ。

末吉 ううん……（封筒を兄の手に握らせる）はい出來た。……（その間に夏子はソツと立ち上って、庭を出て行く）

次郎 俺あな、末、二三カ月したら、やっぱし東京の職業補導所に行くよ。

末吉 でも、もう少しユックリ養生してからにしたらいじやないか。

次郎 （ニコニコして）だってお前、養生なら病院で、しあきる程させて貰って來てる。第一、眼が悪いだけで、ほかはピンピンしてんだからな。……いずれにしろ、これからお前が家の中心になって百姓やって呉れなくちゃならんからな、頼むよ、いいか？

末吉 (これもニコニコして) いいとも! 僕あムズムズしてんだ。やるよ、兄さんの分まで、僕がやる。……(しかし、出て行った夏子のこと、話の間も門口の方ばかり気にしている)

次郎 ……ああ良い音だ。(おさの音を聞いている)

夏子の聲 (門口の方で) ごめんなさい。

次郎 誰か来た。……

末吉 夏子さんだよ! (いふなり、門口の方に走って行く。……見えない目でそっちを見ている次郎の前に、垣根を廻って夏子が現われる。先程からの氣持の動揺をスツカリ整理したと見え、落着いてニコニコした顔である)

次郎 夏ちゃん?

夏子 ええ。……もっと早く来ようと思っていたけど、忙しくって休みが取れないもんですから。……(縁側に並らんでかける)

次郎 ハタ場もつらいだろうな。……でも、よく来てくれた。

夏子 どうなんですの、ぐあいは?

次郎 どうって、こうして身體あピンピンしてんだもの。早く、なんかしたいや。ハハハ。

夏子 (これも静かに聲を出して笑う) ああ、今日私、烏打帽子を町で買って来たわ。(包みを

開く)

次郎 僕の？

夏子 ええ。外を出歩くのに要るだろうと思って。……(新らしい烏打帽子を取り出す) 安物  
なただけ……：七インチだったわね？

次郎 やあ……：そんな……：よかったのに。

(垣根の向うでは末吉が、此方に入っても來れず立去ってもしまえず、氣になるのでソツとのぞいて見たりしてウロウロしている。反対側の縁側の儀八も氣になると見えて、二人を見守っている)

夏子 はい……(次郎の頭に帽子をのせる) 少し小さかったかな？

次郎 (チャンとかぶって見る) いや、ちょうど、いい。……：ありがとう。(かぶったまま撫でている)

夏子 そいから、色眼鏡買って來たわ。色の薄いのを。(取り出す)

次郎 だって色眼鏡なら一つ有るのに。

夏子 でもあれは大き過ぎるし、眞黒で陰氣くさくて駄目。はい……(眼鏡を次郎にかけさせ

る)ほら、ちょうど、いいわ。

次郎 すまんなあ。でも自分に見えやしないのに、陰氣くさいもへチマもない。

夏子 だって、私がいやだわ。

次郎 あそうか。いけねえ。ハハハ。

夏子 ホホホホ。

次郎 だけど、そんなにいろんな物買ってきていいのかね？

夏子 私、金持ちなのよ、これ位平氣だわ。工場へ行ってからの貯金がウンとあるんですもの。

…内でも、そういつてくれるし、あなたが歸って來たら、私達が獨立するための費用にしようと思つて…。

次郎 ……。夏ちゃん、ありがとう。

夏子 ありがとうなんて、變だわ。

次郎 いや、そうじゃないんだ。その事じゃないんだよ。…俺あ、よけいな、くだらん事まで考えていてね。

夏子 何を?…どうして?

次郎 うん、どうしてって事もないけど…それに、夏ちゃんは此處へやって來ても、始終だまっついて、何もいってやくれななんだもんなあ。

夏子 だって、人が一杯来ているのに……はずかしいんですけども。

次郎 いや、もういいんだ。ただ、なんか氣になるもんだからね。實あ、末に頼んで手紙を書い

た。これだ。……けど、讀まなくってもいいやね？（やぶこうとする）

夏子 やぶかなくてもいいわ。（手紙を取って、帯の間に入れる）歸ってから讀むわ。

次郎 どうも……。俺あ、ニカ月もしたら、東京の補導所に行こうと思ってる。

夏子 そう？ いいわ、私も一緒に行く。

次郎 いや、そんな、無理しちゃ、いかん。俺あ一人で大丈夫だよ。

夏子 無理って？

次郎 いや、なにね、俺達あ、なんに限らず、自然に自然に……そうなって行くようにしないと

ですからさ。……今年中にすませる方が、年まわりが良いんですけど……内ですうい  
の。

次郎 ……年まわりなんてもん、夏ちゃん信じてるのか？

夏子 いいえ、信じはしないけど……だって同じ事なら、おっ母さんやお父つあんの喜ぶよう

にした方がいいわ。

次郎 ハハハ、まあ、まあ、いいよ、そんな事。

夏子　ですけどさ……（テレていたが、不意に思い出して、もう一つの包みをほどいて重箱を出す）そうそう、内で思い出したわ、來がけに内に寄ったら、ボタ餅拵こぎえてくれた。次郎さんに食べさせてくれたって。

次郎　そうか。ありがたいや。夏ちゃん食ったのかい？

夏子　いえ、一緒にいただくこうと思って。

次郎　さっそく、いただくか。だが、末にも食わしてやりたい。どこへ行きやがったのかな？

（當の末吉は、ボタ餅どころか、始終の様子を垣根の向うで聞いていて、うれしくてたまらず、聲は出さず、両手を何度も上げて、萬歳を叫ぶような、踊りを踊るような動作をしている）

夏子　じゃ、チョット捜して來るわ。（立ちかける）

次郎　いいよ、今に戻って來るだろう。

夏子　でも……。

次郎　ほら！あの音だ、夏ちゃん！（夏子の片腕を掴む）聞きなよ、あの音だ。

夏子　なあに？ハタ？

次郎 うん。……（ジツと聞き入る。夏子もそこに立ったまま、シミジミと耳をすます。おさの

音は風に乗って、トンハタリ、トンハタリと流れて来る）

次郎 いいな。

夏子 ハタ場で聞いても、こんなに良い音はしないわね。……（涙ぐんでいる）

（間。二人はそのままでも聞き入っている。……不意に、しかし、はじめは、聞こえるか聞こえぬ位に微かに笛の音がして来る。儀八が、いつの間にか腰から抜いた笛の吹口を唇でしめしながら、馬鹿囃しを試みはじめたのである。次第にそれと聞きわけられるように高くなってくる）

次郎 ……なんだ？

夏子 笛だわ。

次郎 ……ああ、儀八の小父さんが、吹き出した。……裏の路のへんかな。（笛の音は、儀八が、わざと此の二人をじゃますまいと思って、遠くで吹いているような、かすれた吹き方をしているのである。……二人から見えない垣根の向うの末吉も、笛の音を聞きつけ、耳を傾けていたが、やがて手の先と足の先だけで、笛の音に拍子ひょうしを取っている間に、次第

に、ひよっとこ踊りの足つきになっている。なにしろ、うれしくて仕方がなく、そうでもしなければ、自分のうれしさのはけ口がない様子である。ヒョイと気が附くと、先程持ち出したひよっとこの面が腰にさがっている。それを取ってスポリとかぶる)

次郎 ……あれは、小父さん、俺に聞かせる気なんだ。……たしかに、そうだ。俺に聞かせる気だ。

夏子 良いわね、……まるで、浮き立つようだわ。

次郎 ……ありがとう、小父さん。(正面に向かってお辭儀をする) ……もう大丈夫だよ、俺あ……

(おさの音と笛の音が調子よく入りまじって来る。末吉は、誰も見えない所で、笛に合わせてひよっとこを踊り出す。……それを知らず、又、儀八が縁側の向うで笛を吹いている事にも気が附かぬ次郎と夏子が、そのまま、耳をすましている姿)

(昭和十七年作)

## 附記

- 1 各人物の言葉は、その地方の方言でやること。
- 2 なるべくなら、實際の家の縁側を使ってやり、見物人は庭にむしろでも敷いて見ること。特別の背景や飾りつけは一切不要。
- 3 篇中、慰問隊のプログラムは臨機に變える事が出来る。變えた方が良い場合もあるし、變えざるを得ない場合もある。その邊は世話役や演出者や参加全員の創意を大いに働かせてほしい、たとえば、都々逸ととゑいっの歌える人はいないが、木やり音頭を歌える人が居る場合には、木やり音頭にするとか、八木節は駄目だが浪花節ならやる人がいれば浪花節にする。ブラス・バンドが間に合わぬ場合は合唱隊にするとか、その他、眼の不自由な人を慰問する主旨にかなったものならば、なんでもよろしい。但し、なるべくその地方の特色のよく出たものを、充分に稽古してやる事が必要である。その地方に古くから有る盆踊りの歌と踊り、麥打歌、何々囃はやし、何々舞い、何々甚句等々を出してほしい。ただプログラム全體があまり長時間を要してはならぬ。全部で三十分位が最適である。
- 4 しろうとが上演する場合も、くろうとが上演する場合も全員そろった稽古を二週間以上やること。それだけの稽古のやれない時は、絶対に上演してはいけない。

底本 現代日本文学全集 第50（真船豊、久保栄、三好十郎、木下順二集）

出版者 筑摩書房

出版年月日 1956